

原 著

幼児期の道徳性と客観的状況理解との関係

吉村 齊^{1*}

要約：本研究は、幼児期の道徳性と客観的状況理解との関係、およびその関係の性差や発達差を検討したものである。道徳性は善悪の判断に関するもので、動機論的判断と結果論的判断に分類された。加えて、客観的状況理解は自己の誤信念、他児の信念、他児の願望から構成されたものであった。調査参加者は44名の4歳児と33名の5歳児からなる合計77名の幼稚園児であった。本研究は個別面接法で実施され、以下の結果が得られた。4歳女児において、動機論的判断の傾向が強い子どもは、結果論的判断の傾向が強い子どもに比べると、他者の願望を不当に意地悪と捉えていた。他方、4歳男児や5歳児では道徳性による願望の違いは見られなかった。さらに、誤信念や信念においても、道徳性による違いは見られなかった。以上のことから、4歳女児において道徳性の発達が他児の願望の理解に影響を及ぼす要因であることが示唆された。

キーワード：道徳性、客観的状況理解、願望、幼児期

問 題

幼児期は、仲間交渉が本格化する時期である。とりわけ仲間交渉を通して発達する道徳性は、他者とのかかわりを調整する上で重要な意味をもつ。ただし、この時期の子どもたちは、自分の視点と他者の視点を切り離して考えることに対する個人差が大きく、自身の考えに固執したいざこざが多いことも特徴である（斉藤・木下・朝生、1986）。例えば、相手の考えを理解せずに一方的に踏みこむ行動は、結果的にその子どもたちの社会化の過程が阻害されるなど（Michelson, Sugai, Wood & Kazdin, 1983）、その後の発達に影響を及ぼすことも示唆されている。Eisenberg & Mussen（1989）によると、この特性はPiagetの発達段階における自己中心性に起因するとともに、

このことが道徳的推論に影響をもたらすという。朝生（1987）においても、状況や社会的カテゴリーに関する既存知識、さらには特定他者の行動特性情報を連動して推測することが十分でないためであることが示唆されている。すなわち、自分と他者が置かれた状況に基づいて客観的に自分や他者の行為を理解すること（以下、客観的状況理解）と道徳性の発達との間には深い関連があると推察される。

従来の道徳性の発達に関する心理学的研究において、幼児期は他律的道徳の段階であり、権威に服従して善悪を判断しやすいことが示唆されてきた。それゆえ、幼児期における道徳性と客観的状況理解との関係については、児童期以降に比べると不明な点が多いと思われる。そこで、本研究で

^{1*}高知学園短期大学 幼児保育学科 Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

は、幼児期における道德性の発達と客観的状況理解の関係について探索的に検討することとする。

まず、幼児期の道德性の特徴について検討する。他者との調和的關係形成を目的とした道德性について、ルールを理解はその代表である。なぜならば、ルールに基づいた判断・行動が仲間關係を発達させるからである（吉村，1996）。この問題について、二宮（1980）は、幼児期には多くの子どもたちが動機よりも結果を基準して善悪の判断を行うことを見出した。二宮（1980）では、Piagetタイプの4種類の事例に対する反応から道德性の判断基準が検討された。その結果、Piagetタイプの例話をを用いた理論は、わが国においても支持されることとなった。

また、自己と他者との關係から道德性を検討した Eisenberg（1992）によると、幼児期には他人の要求を志向する傾向があるという。すなわち、他人に関心を示し始めていることが示唆されている。斉藤・木下・朝生（1986）によると、幼児期に多いトラブルの原因として物・場所の占有が挙げられていた。それゆえ、他者に関心を寄せながらも、自己統制が十分でないことから、自己抑制ができず、トラブルに至ることが推察される。それを解決するためには相互の要求を調整しなければならない。とりわけ、周囲の子どもたちも納得できるよう判断することによって、他者の考えも考慮することができるとともに、自己の見解についても状況を考慮して客観的に捉えることが容易になることが考えられる。その結果、他者とのかわりを調整し、形成される仲間關係をより深いものに発展させることが期待される。それゆえ、道德性の発達において、他者理解はもちろん、自己の心的過程も客観的に捉えて正しく理解することが求められるのである。

以上のことから、状況を客観的に理解するためには、自己と他者の心的過程の理解も求められると推察される。人の心的過程について、例えば Wellman（1990）によると、人の行為は信念と願望から構成されているという。信念とは行為者の知識や確信、想像、意見等に関することであり、

願望とは行為者の望みや目標、期待等に関することである。また、Perner（1989）は、信念と現実の關係の理解を深めるためには信念だけでなく誤った信念（以下、誤信念）の理解も不可欠であることを指摘し、検討が蓄積されてきた。その結果、4歳から7歳にかけて誤信念の理解力は増すことが指摘され（Wimmer & Perner, 1983）、幼児期であっても人の行為の状況を理解することは決して難しくないことが示唆された。森野（2010）も述べるように、こうした心の理論の発達によって人の心の理解が進み、仲間とのかかわり方も豊かになってくるのである。それゆえ、自己と他者との調和的關係を形成するためには、他者だけでなく自分自身も含めた誤信念、信念、願望に着目して客観的に捉えていくことが、他者から見た自己を推論する上で不可欠になると考えられる。本研究では、ある特定の仮想場面の状況における自分自身の誤信念や他者の信念および願望を、現実の自分自身の考えと切り離して客観的に理解できるか否かを客観的状況理解として取り上げ検討することとする。

なお、幼児期は自己中心性の特性が強い時期でもある。それゆえ、主観的な視点が強く、自己の置かれた状況に着目して客観的に捉えることは難しい子どもが相対的に多いと推察される。他方、客観的に状況を理解することができれば、自分と他者との交渉を調和的に調整することも期待できると思われる。それゆえ、ルールを正しく理解することによって、適切に自己主張と自己抑制を図っていくことができるだろう。このことから、道德性の発達と客観的状況理解との間には深い関連があると思われるのである。

しかし、道德性と客観的状況理解との關係、およびそれに関連した検討は、幼児期において十分な取り上げ方がされてきたとはいえない。7歳くらいを境に結果論的判断から動機論的判断に移行することから（二宮，1980など）、児童期以降で検討されることが多かったためであると推察される。それでも、自己抑制は全般的に幼児期には一貫して発達し続けるなど（柏木，1988）、規則を

理解して我慢することによって状況に応じた自己を客観的に捉える機会が多いと思われる。逆に社会的環境の中で効果的かつ適切に行為する能力の欠如が不適応行動を招き (Michelson, Sugai, Wood & Kazdin, 1983)、その経験が成人に至るまで影響を及ぼすことも示唆されている (Morris, 1976)。とりわけ、善悪の判断基準は生身の人間とのやりとりの中で実践され、身についていくものである。それゆえ、幼児期における道徳性の発達と客観的状況理解との関係が明確になれば、子どもの社会性の発達の様相を把握するだけでなく、子どもの将来に向けて善悪の判断の成長を意識したり自己統制を心がけたりする言葉がけのあり方を追究する上でも意義があると思われる。そこで、本研究では、道徳性として善悪の判断基準の発達に注目し、誤信念の発達変化が始まると思われる4歳児と就学直前の5歳児を対象に、幼児の善悪の判断基準の発達に応じて、客観的状況理解の発達に違いがあるか否か、またその関係に性差や発達の違いが見られるか否かを検討することとする。

では、具体的に善悪の判断基準と客観的状況理解との関係について検討する。子どもが仲間を受け入れてもらう上で、自分がどのような人間であるかを理解し、他者とうまく関係をもちながら集団や社会に適応していくことが求められる (原, 1994)。逆に仲間を受け入れてもらえない子どもの場合、仲間の喪失によって社会的学習機会が奪われたことも原因の1つであるという (Michelson, Sugai, Wood & Kazdin, 1983)。二宮 (1980) によれば、善悪の判断基準の発達は結果論的判断から動機論的判断に移行していく。動機論的判断に基づくことは、他者の心的過程を考慮することと深く関連する。それは、状況判断に努めることによって可能になるからである。したがって、動機論的判断の傾向が強い幼児は、結果論的判断の傾向が強い幼児に比べると、自己や他者の心理についての確に捉えていくだろう。それゆえ、その状況に応じた誤信念や信念、願望を正しく理解できていると予測される。

なお、幼児の道徳性に関する伝統的理論としては、5歳以降に自己中心的思考が減少することが指摘されてきた (大伴, 1960)。すなわち、5歳児になると、一般的に自己と他者を切り離して状況を客観的に理解できるようになると推察される。いいかえると、先述した「状況に応じた誤信念や信念、願望の理解」は4歳児においてはまだ十分ではなく、それゆえ道徳性に応じて異なることが顕著になると推察される。

さらに、遊びの発達の性差に注目すると、これらの様相に性差が関連することも推察される。例えば、吉村・杉浦 (1993) によると、屋内での遊びが増加する現代社会において、ヒーローごっこのような遊びは幼児期の男児に残っているという。ヒーローごっこでは正義と悪役の構図がとられやすいことから、善悪の認識を深める機会になるとと思われる。また、いざこざが起こった際、女児が妥協や説明で解決を図ることに対して、男児は身体的攻撃など一方的な方略をもっとも用いる経験が多いという (Miller, Danahar & Forbes, 1980)。それゆえ、男児の方が女児に比べて早く相手の心理に注目して善悪を判断することが推察される。したがって、男児では、女児よりも早い時期から、道徳的判断の様相に関係なく、状況に応じた誤信念や信念、願望の理解が可能になっていると思われる。

それに対して、女児では自分の言い分を主張したり相手の主張を聞いたりする機会が、男児に比べると少ないことが、Miller, Danahar & Forbes (1980) より推察される。それゆえ、お互いに理解しあえる仲間交渉の機会が少ないと思われる。したがって、女児の場合、4歳児では状況に応じた誤信念や信念、願望を正しく理解することは一般的にまだ難しいことが予想される。その中で、動機論的判断の傾向が強い女児であれば、結果論的判断の傾向が強い女児に比べて、状況に応じた誤信念や信念、願望を正しく理解しやすくなることが予想される。なお、5歳児になると、状況に応じた誤信念等の理解も可能になることから、善悪の判断基準の傾向による違いはなくなることが

予想される。

以上のことから、本研究では以下の結果を予想して吟味することとする。

仮説：女兒の場合、4歳児において動機論的判断をする子どもの方が、結果論的判断を行う子どもよりも誤信念や信念、願望を正しく理解している。他方、5歳児の女兒や男児全般にこうした関係は見られない。

方法

調査対象者 Wimmer & Parner (1983)の結果より、4歳以降に信念－願望推論が著しく発達することが推察される。そこで、幼児期における特徴を把握するため、4歳児と5歳児を対象に検討を進めることとした。調査に参加した対象者は、A県内私立幼稚園に通園する4歳児クラス44名（男児27名、女児17名）、5歳児クラス33名（男児14名、女児19名）であった。

手続き

道徳性測定材料の作成 幼児の善悪の判断基準を測定するため、二宮（1980）が作成したPiagetタイプの例話を参考に以下の4つの場面を作成した。なお、①は損害結果が悪い場合、②は動機が悪い場合とした。

1. 水をこぼす場面

① B君／ちゃん（対象者の名前、以下同じ）は、お母さんに金魚鉢の水を替えてと頼まれました。お水を替えて運ぼうとした時、手が滑って金魚鉢を落として割ってしまいました。金魚は無事でしたが、廊下が水浸しになってしまいました。

② B君／ちゃんは、お母さんに家の中を走っ

てはいけないと注意を受けました。しかし、それにもかかわらず、家の中を走ってしまいました。その際、机の上にあったコップを倒してしまい、水をこぼしてしまいました。

2. 約束を破る場面

① B君／ちゃんは、友だちと動物園に行く約束をしていました。動物園に向かっている時に、困っているおばあさんに出会いました。B君／ちゃんは、そのおばあさんを助けてあげましたが、約束の時間に間に合わず、動物園が閉まってしまい、友だちを泣かせてしまいました。

② B君／ちゃんは、友だちと動物園に行く約束をしていました。動物園へ向かっている時に、困っているおばあさんに出会いました。B君／ちゃんは、友だちとの約束の方が大事だったので、おばあさんはそのままにして動物園に向かいました。そして、約束の時間に間に合い、友だちと動物園で楽しく遊びました。

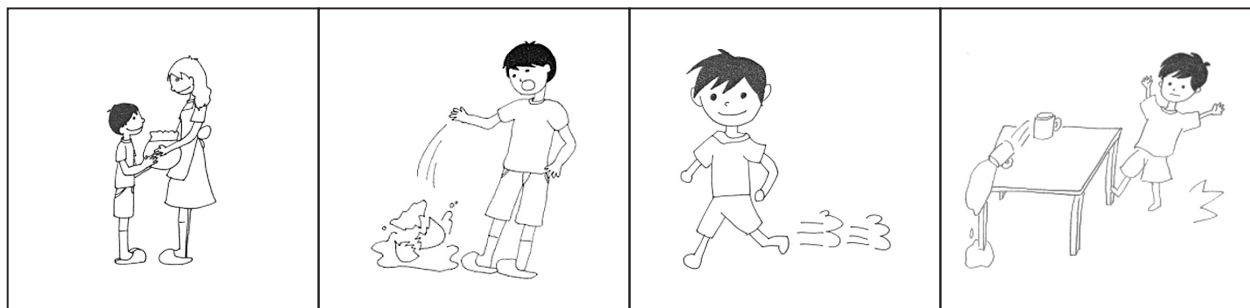
3. 転倒させる場面

① B君／ちゃんは、鬼ごっこをしていました。鬼のB君／ちゃんが友だちにタッチすると、友だちはびっくりして転んでしまいました。そして、手と足をすりむく怪我をしてしまいました。

② B君／ちゃんは、友だちと遊んでいました。B君／ちゃんは、友だちを泣かせてやろうと思い、友だちを突き飛ばしました。友だちは尻もちをつきましたが、怪我はしませんでした。

4. ブロックを壊す場面

① B君／ちゃんは、お母さんのお手伝いをするためにブロックを片づけようと思いました。その時、手が滑って全部壊してしまいました。



① 損害結果が悪い場面

② 動機が悪い場面

Figure 1 道徳性の説明に用いた絵（水をこぼす場面、男児用）

② B君／ちゃんは、一番上のブロックが欲しくて、勝手にブロックをとろうとしました。しかし、バランスが崩れて1つだけ落ちてしまいました。

道徳性の測定 作成された4つの場面の様子を示した絵 (Figure 1) を提示しながら概要を説明し、①と②のどちらが悪いと思うかを質問した。

客観的状況理解の測定材料の作成 対象者が、客観的な立場になって、人の行為の過程を理解できているか否かを測定するため、子安 (1997) の信念-願望シエマに関する課題を参考にして4つの場面を作成した。

ここでの課題は、日常生活で馴染みのある物を取り上げ、対象者 (B) が使用した物を片づけて退室した後、別の子ども (C) が入ってきて、その物で遊び、その後別の場所に片づけたり取り替えたりして退室する物語である。この物語を聞いている過程において、幼児は物が移動したり変更されたりしていることを理解できる。しかし、物語中に登場する本人は、移動した場面にいなかったことから、物が移動していることには本来気がついていないこととなる。つまり、この課題では、現実の自分と物語に登場する自分を切り離して考えることが要求されるのである。また、対象者が当初その物を使っていた場面にCはいなかったことから、対象者が置いた場所から意図的に移動したわけではないことが前提となる。そこで、Cの行為が「対象者の状況を知っている」上でとられたものか否か、さらには対象者の置いた場所から物が移動していたという結果について「自分を困らせたいという意図」がCにあったか否かを測定することによって、物語を聞いた自己と切り

離して状況を理解しているか否かを発達的に吟味することができるだろう。

以上のことから、物語中の自己を現実の自己と切り離して移動場所を答えられるか否かに関するものを誤信念、物語中の自己が受けた状況を現実の自己と切り離してCの状況を答えられるか否かに関するものを信念、さらにCの行為の意図を物語中の自己の立場に立って答えられるか否かに関するものを願望として測定することとした。

なお、他児については、実在の園児の名前を使用すると、調査後の仲間関係に支障を来す恐れもあることを配慮し、本研究では架空人物の名前を用いることとした。

1. 折り紙を用いた場面

B君／ちゃんは折り紙を上引出しにしまって部屋を出ました。

その後、C君／ちゃん (対象者のクラスにはいない同性の架空人物名、以下同じ) が部屋に入ってきて、上の引出しから折り紙を出して遊びました。

遊び終わった後、C君／ちゃんは余った折り紙を下引出しにしまって部屋を出ました。

次の日、またB君／ちゃんが部屋に入ってきました。

2. ブロックを用いた場面

B君／ちゃんは、ブロックで剣を作りました。後で遊ぼうと思い、剣を箱に入れ、部屋を出ました。

C君／ちゃんが部屋に入ってきて、箱の中から剣を取り、壊して鉄砲を作りました。

後から遊ぼうと思い、鉄砲を箱に入れて部屋に出ました。



Figure 2 客観的状況理解測定用信念-願望推論シエマの絵 (ブロックの場面、女児用)

その後、B君／ちゃんがまた部屋に入ってきました。

3. 果物を用いた場面

B君／ちゃんは、後でみかんを食べようと思い、ふたをして出て行きました。

その後、C君／ちゃんがやってきて、ふたを開け、みかんを食べてしまいました。

その代わりに、C君／ちゃんはりんごを置いて、ふたをしてから部屋を出て行きました。

その後、またB君／ちゃんが部屋に入ってきて、ふたを開けようとしています。

4. 料理をしている場面

B君／ちゃんは、炒めた野菜が入っているフライパンを見ました。

その後すぐにB君／ちゃんはお手洗いに去了。

そこへC君／ちゃんがやって来て、フライパンにあった野菜を捨て、代わりに魚を入れ、部屋を出ていきました。

B君／ちゃんが再びフライパンの前を通ろうとしています。

客観的状況理解の測定 作成された4つの各場面において、物語の様子を示した絵 (Figure 2) を提示しながら、自己の誤信念、他児の信念、他児の願望に関する質問を行った。具体的な質問は以下の通りである。

1. 誤信念 B君／ちゃん自身が、折り紙を用いた場面ではどちらへ取りに行くか、ブロック、果物、料理の各場面では再入室して取り出そうとしている時に何があるか尋ねた。折り紙の場面での回答が、下の引出しなら1点、上の引出しなら2点とした。またブロックの場面では鉄砲なら1点、剣なら2点、果物の場面ではりんごなら1点、みかんなら2点、さらに料理の場面では魚なら1点、野菜なら2点とした。なぜならば、各場面でB君／ちゃんは物を入れ替えたり取り替えたりした場面にはいなかったことが想定されているからである。それゆえ、C君／ちゃんが部屋に入る前の状態を回答していれば客観的に理解できていると解釈された。なお、回答

された後にC君／ちゃんの行為をB君／ちゃんが見ていなかったことを確認し理解させた上で次の質問を行うこととした。

2. 信念 C君／ちゃんは、事前にB君／ちゃんが見ていたことや内容を知っていたか否かを質問した。ここでも、C君／ちゃんが部屋に入る前の状態を回答していれば客観的に理解できていると解釈される。物語ではBとCが遭遇した場面はないことから、「知らない」が物語から解釈される回答と位置づけることができる。そこで「知っていた」なら1点、「知らなかった」なら2点とした。

3. 願望 C君／ちゃんは、B君／ちゃんを困らせようと思っていたか否かを尋ねた。具体的には、折り紙の場面では困らせようと思って上の引出しから下の引出しに移動させたか否か、ブロック、果物、料理の各場面では困らせようと思って物を替えたか否かを質問した。ここでも、C君／ちゃんが部屋に入る前の状態を回答していれば客観的に理解できていると解釈される。つまり、物語上ではB君／ちゃんとC君／ちゃんは遭遇しておらず、B君／ちゃんが出た後にC君／ちゃんが入室したことから、B君／ちゃんが部屋で行っていたことは把握していないこととなる。ただし、物語を聞いた調査対象者自身はその概要を知っていることから、物語の内容を把握するためには、対象者自身が物語上の自己 (B君／ちゃん) と切り離して回答しなければならないこととなる。そこで、C君／ちゃんが元の場所から移動させた行為に着目して「困らせようとした」と回答すれば1点、C君／ちゃんが入る前の状態に着目して「困らせようとはしていない」と回答すれば2点とした。

なお、1-3において、その他と思われる回答については、調査後に3名の面談者で検討し、あらかじめ用意された選択肢に該当すると判断された場合には得点化した。ただし、明らかに理解不足と思われる回答については0点とした上で分析の対象に含めた。これは客観的状況理解の発達を検討する際、理解できているか否かも重要な変数

であると思われるからである。

調査の実施 調査の実施にあたっては、予め幼稚園側に対して調査の目的や方法および結果の公表の方針などを説明し、園名および対象者の氏名や生年月日など観察だけではわからない一切の個人情報伏せることを条件に同意を得た。その上で、2009年12月上旬から中旬にかけて、幼稚園の教室やホールを利用して個別面談を行った。面談を行ったのは幼児保育を専攻する短期大学2年生（2年制）26名であった。面談を行うにあたり、学生は質問内容の理解や質問方法、および記録の取り方に関するオリエンテーションを受け、模擬面談を体験してから臨んだ。

結果

道徳性の群化 道徳性を特徴的な群に分類するため、まずは各対象者の道徳性の得点化を行った。得点化を行う際、結果論的判断から動機論的判断に移行する発達過程（二宮，1980）に注目した。具体的には、各場面の回答について損害結果が悪い①と回答した場合は、結果論的判断の段階にあり、道徳性の発達がまだ動機論的判断には至っていないと解釈できることから1点とした。一方、動機が悪い②と回答した場合は、結果論的判断を経て動機論的判断になっていると解釈できることから2点とし、その上で場面あたりの平均値を算出した。これを各対象者の道徳性得点とした。つまり、道徳性得点が高いほど動機に注目しやすい段階にあり、逆に低いほど損害結果に注目した判断をしやすい段階にあることを意味することとなる。そこで、全体の平均値（ $M=1.62, SD=0.36$ ）

を基準に、道徳性得点が平均値より高い対象者を動機論的判断群（ $N=43$ ）、逆に低い対象者を結果論的判断群（ $N=34$ ）に分類した。

道徳性と客観的自己理解との関係 まず、客観的自己理解に関する4場面での回答を合計して誤信念、信念、願望各得点を算出した。次に、誤信念、信念、願望各得点を従属変数とした性別（2）×年児（2）×道徳性（2）の三要因分散分析を行った。なお、多重比較には有意水準を $\alpha=.05$ としたTukeyのHSD法を用いた。分散分析によるF値および有意水準をTable 1に、また各変数における平均値と標準偏差についてはTable 2に示した。

1. 誤信念 分散分析の結果、いずれの要因においても有意差は認められなかった。

2. 信念 分散分析の結果、年児の主効果が認められた（ $F(1,69)=4.05, p<.05, MSe=2.90$ ）。多重比較を行うと、5歳児の信念得点（ $M=6.83, SD=1.25$ ）が4歳児（ $M=5.95, SD=1.95$ ）より有意に高かった。

3. 願望 分散分析の結果、性別、年児、道徳性の三要因による交互作用が認められた（ $F(1,69)=4.25, p<.05, MSe=3.49, Figure 3$ ）。単純主効果の検定を行うと、女兒において4歳児では結果論的判断群の願望得点（ $M=5.63, SD=1.41$ ）が動機論的判断群（ $M=2.89, SD=2.15$ ）より有意に高かった（ $F(1,69)=9.08$ ）。女兒の5歳児および男児の4、5歳児における道徳群の間で有意差は見られなかった（ $F(1,69)=.13; F(1,69)=.14; F(1,69)=.15$ 、いずれも *n.s.*）。

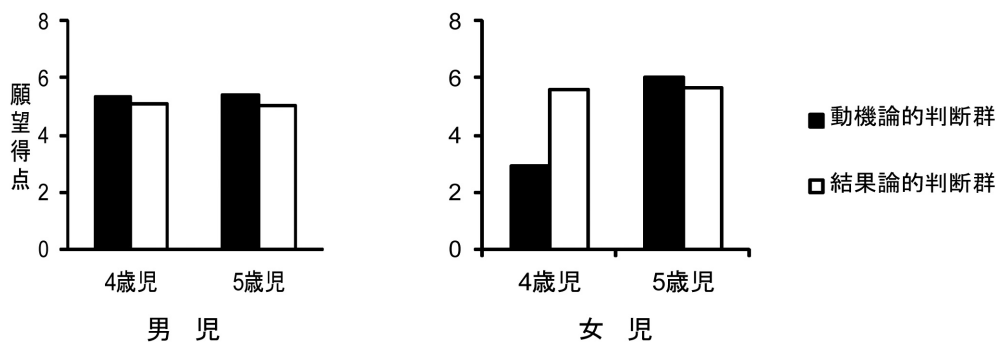


Figure 3 願望における性別に見た年児と道徳性の交互作用

Table 1 性別×年児×道德性の三要因分散分析による F 値と有意水準

独立変数	性別 (a)	年児 (b)	道德性 (c)	a × b	a × c	b × c	a × b × c
<i>df</i> (69)	1	1	1	1	1	1	1
誤信念 (<i>MSe</i> =2.14)	2.55	2.59	.27	.59	.42	.08	.14
信念 (<i>MSe</i> =2.90)	.56	4.05*	1.45	.10	.75	1.87	.11
願望 (<i>MSe</i> =3.49)	.12	3.03	1.96	3.03	1.57	1.76	4.25 *

* $p < .05$

Table 2 道德性、年児、性別による客観的状況理解各要因の平均値と標準偏差

性別	年児	道德性	<i>N</i>	誤信念	信念	願望	
男 児	4 歳児	動機論的判断群	12	4.92 (1.38)	5.50 (1.98)	5.33 (1.78)	
		結果論的判断群	15	4.73 (1.83)	6.07 (1.62)	5.07 (1.71)	
	5 歳児	動機論的判断群	9	5.44 (1.33)	6.89 (1.45)	5.00 (2.35)	
		結果論的判断群	5	4.80 (1.79)	6.60 (1.14)	5.40 (1.82)	
	女 児	4 歳児	動機論的判断群	9	5.11 (1.17)	5.44 (2.65)	2.89 (2.15)
			結果論的判断群	8	5.13 (1.45)	7.00 (1.41)	5.63 (1.41)
5 歳児		動機論的判断群	13	5.92 (1.19)	6.85 (1.07)	6.00 (1.53)	
		結果論的判断群	6	6.00 (1.41)	7.00 (1.67)	5.67 (2.42)	

N : 人数

上段の数値が平均値、下段の () 内の数値が標準偏差、平均値が高いほど物語中の人物の状況を理解していることを示す。

考 察

本研究では、幼稚園 4 歳児クラスと 5 歳児クラスに所属する幼児を対象に、善悪判断の基準を動機に帰属するか結果に帰属するかに応じて、信念－願望の推論がどのように発達しているのかを検討した。以下では、得られた結果に基づいて考察

を行うこととする。

本研究の目的は、4 歳女児で動機論的判断をする傾向が強い場合は信念や願望を正しく理解しているか否かことを明らかにすることであった。このことは、道德性、年児、性別の交互作用によって考察することができる。本研究では、他児の願

望においてこの3要因の交互作用が認められた。ただし、得られた結果は仮説に反し、4歳女児では結果論的判断をする傾向が強い場合に願望を理解しているものであった。5歳児全般や4歳男児の願望得点とほぼ同じであることから、むしろ動機論的判断群の4歳女児の願望得点のみが顕著に低いと解釈した方がよいだろう。なお、5歳女児や男児においては道徳性による差は認められず、この点についての仮説はその有効性が示唆されたとと思われる。

以上が本研究で得られた主たる結果である。以下では、特に4歳女児で動機論的判断をする傾向が強い場合に願望を誤って解釈していることが示唆された点について考察を進める。とりわけ、動機に注目することによって他者を捉える意識に芽生えているにもかかわらず、物語の題材に出たもう1人の子どもを不当に意地悪な存在として捉えていることにギャップの大きさが感じられる。本研究で用いた客観的状況理解に関する課題の場面は、主人公が片づけた場所や物が他者によって変更されている内容であった。すなわち、自分自身が被害を受けたことを意味する内容であった。この内容の捉え方が本研究の結果に影響を及ぼした原因の1つであることが推察される。以下では、この点について詳しく考察することとする。

まずは発達の観点より年児の違いについての考察を行うこととする。Wellman & Wooley (1990)によると、3歳頃までは願望と情動が結びつきやすいことが示唆されている。情動とは一時的で強い感情の動きのことであり、その情動によって認知的な活動が中断されたり支配されたりすることもある。特に子どもは、複数の情動が同時に生じた場合、最初に心に浮かんだ情動に焦点を当ててしまう傾向がある (Terwogt & Harris, 1993)。本研究で用いた客観的状況理解に関する場面において自分自身が被害を受けたと感じやすかったとすれば、年児の低い子どもの場合、物語に登場する他児の願望を不当に意地悪であると帰属しやすいことも考えられる。さらに、道徳性を動機に注目することによって、自分自身の被害意識を根拠

に、他者の動機を過度に悪く帰属し、それゆえ願望もいっそう意地悪に帰属しやすくなることが推察される。本研究では4歳児と5歳児を対象に調査が行われたが、本研究の場合は Wellman & Wooley (1990) の指摘が4歳児クラスの対象者にあてはまりやすかったのだろうか。幼児期は自己中心性が強い時期であるとされていることから、自己と物語の自己とを十分に切り離すことができないまま物語に感情移入しやすいことが推察される。すなわち、情動の抑制の発達が道徳性と願望の理解との関係における媒介変数として機能していること、その結果4歳児では情動に基づく判断が行われやすかったことが示唆されるのである。

さらに、性差の観点からも考察を進めることとする。Zahn-Waxler, Radke-Yarrow & Brady-Smith (1977)によると、女児は感情的共感性が男児より高いという。そして、Feshbach & Feshbach (1969)によれば、共感性が高い女児は低い女児よりも攻撃的な傾向があるという。対照的に、男児は共感性に欠けるほど攻撃性が強いことも示唆されている。それゆえ、女児の方が本研究の質問で使用された物語の主人公、つまり自分自身に感情移入し、その感情に基づいてもう1人の登場人物に対する印象を形成していることが考えられる。とりわけ、女児の自己抑制の発達は4歳5カ月から5歳10カ月にかけて停滞しやすい時期があることから (柏木, 1988)、4歳女児が情動の影響を受けやすかったことも推察される。したがって、先述したように、本研究で用いた課題が自分自身を被害者として位置づけやすかったとすれば、女児の方がもう1人の登場人物の行為を意地悪によるものと帰属しやすかったことが考えられるのである。

以上のことから、全般的に年児の低い子どもは情動に基づいて判断しやすいこと、とりわけ女児が物語に登場する自己に共感しやすいことが示唆される。すなわち、5歳児や4歳男児の群に比べると、4歳女児の群は、物語の主人公の被害意識に共感しやすく、そこで浮かんだ情動に基づいて

反応しやすいことが考えられる。さらに、動機に注目して善悪を判断する傾向が強い場合、被害者の立場から相手の動機を判断し、それゆえ相手の子どもの願望を意地悪によるものと捉えやすかったのだろう。その結果、仮説に反する結果が見られたものと思われる。いいかえると、情動に左右されにくい課題において本研究の仮説を検討することが今後の課題として残されたといえる。

なお、本研究は、道徳性と客観的状況理解との相関関係に焦点を当てて検討したことから、両者の因果関係や媒介変数の効果を考察するには限界がある。今後、この問題を確認するためには縦断的、実験的な検討を導入して変化の様相を追究することが望まれる。あるいは、本研究で取り上げた「対象者が被害意識をもちやすい」場面とは異なり、情動の混入を避ける内容についても追究し比較検討することも求められる。その上で、さらに、自然観察による事例研究と並行して調査研究の結果との整合性や違いを考察するなど、多様な研究方法から解明していくことも今後の課題と思われる。

ところで、本研究では77名の幼児を対象として調査が進められた。要因によっては人数の差が大きく、特定の群によっては少数しか該当していないものもあった。サンプルサイズが小さい場合、本来効果があったとしても、検定結果は有意差なしになりやすいことから(村井, 2006)、調査対象者数を増やして追究することも今後の課題である。あるいは、人数の差が多いことが因果関係の様相を物語っていることも推察される。今後は、実験的観察を導入して検討するなど、因果関係の解明を目的とした他の研究方法との比較も望まれる。

このように、本研究では追究すべき課題が残されたことから、あくまでも暫定的な結果として受け止めなければならない。それでも、道徳性と願望推論の関係が示唆されたことは、幼児の社会性と認知が相互に影響を及ぼしあうことによって発達していることが確認された点で意義があったと思われる。

謝辞：本研究の準備・実施にあたっては、平成21年度高知学園短期大学幼児保育学科2年生26名の協力を得ました。深く感謝いたします。また、調査にご協力くださった幼稚園の先生方、園児の皆様にも改めて謝意を表します。

引用文献

朝生あけみ, 幼児期における他者感情の推測能力の発達：利用情報の変化, *教育心理学研究*, **1987**, 35, 33-40.

Eisenberg, N., *The caring child*, **1992**, Cambridge, MA: Harvard University Press. (二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子(訳), *思いやりのある子どもたち*, **1995**, 京都：北大路書房, 25-41.)

Eisenberg, N., & Mussen, P., *The roots of prosocial behavior in children*, 1989, New York: Cambridge University Press. (菊地章夫・二宮克美(訳), *思いやり行動の発達心理*, **1991**, 東京：金子書房, 152-157.)

Feshbach, N. D., & Feshbach, S., The relationship between empathy and aggression in two age groups. *Developmental Psychology*, **1969**, 1, 102-107.

原 孝成, 他者についての理解, 祐宗省三(編), *子どもの発達を知る心理学*, **1994**, 京都, 北大路書房, 94-98.

柏木恵子, 幼児期における「自己」の発達：行動の自己制御機能を中心に, **1988**, 東京：東京大学出版会, 17-43.

子安増生, *子どもが心を理解するとき*, **1997**, 東京：金子書房, 106-109.

Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E., *Social skills assessment and training with children*, **1983**, New York: Plenum Publishing. (高山 巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一(訳), *HAND BOOK こどもの対人行動：社会的スキル訓練の実際*, **1987**, 東京：岩崎学術出版社, 1-18.)

- Miller, P. M., Danahar, D. L., & Forbes, D., Sex-related strategies for coping with interpersonal conflicts in children aged five and seven. *Developmental Psychology*, **1980**, 22, 543-548.
- 森野美央, 人の心の理解と仲間関係の発達, 無藤隆・中坪史典・西山 修 (編), *発達心理学*, **2010**, 京都: ミネルヴァ書房, 86-97.
- Morris, H. H., Aggressive behavior disorders in children: A follow-up study. *American Journal of Psychology*, **1956**, 112, 991-997.
- 村井潤一郎, サンプルサイズに関する一考察, 吉田寿夫 (編), *心理学研究法の新しいかたち*, **2006**, 東京: 誠信書房, 114-141.
- 二宮克美, 児童の道徳的判断に関する一研究: Gutkin の 4 段階説の実験的検討, *教育心理学研究*, **1980**, 28, 18-27.
- 大伴 茂, *ピアジェ幼児心理学入門*, **1960**, 東京: 同文書院, 157-170.
- Perner, J., Is "thinking" belief? : Reply to Wellman and Bartsch. *Cognition*, **1989**, 33, 315-319.
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ, 仲間関係, 無藤 隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編), *子ども時代を豊かに: 新しい保育心理学*, **1986**, 東京: 学文社, 59-111.
- Terwogt, M. M., & Harris, P. L., Understanding of emotion, M, Bennett (Ed)., *The child as psychologist: An introduction to the development of social cognition*, **1993**, New York: Harvester Wheatsheaf. (渡辺弥生 (訳), 情動の理解, 二宮克美・子安増生・渡辺弥生・首藤敏元 (訳), *子どもは心理学者: 心の理論の発達心理学*, **1995**, 東京: 福村出版, 90-119.)
- Wellman, H. M., *The child's theory of mind*, **1990**, Cambridge, MA: MIT Press, 93-121.
- Wellman, H. M., & Woolley, J., From simple desires to ordinary beliefs: The development of everyday psychology. *Cognition*, **1990**, 35, 245-275.
- Wimmer, H., & Perner, J., Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **1983**, 13, 103-128.
- 吉村 齊, 幼児期の遊び仲間形成における道徳的判断と対人行動の特性, *高知学園短期大学紀要*, **1996**, 26, 1-9.
- 吉村たづ子・杉浦喜久子, 小学生の遊び, *日本教育心理学会第35回発表論文集*, **1993**, 494.
- Zahn-Waxler, C., Radlke-Yarrow, M., & Brady-Smith, J., Social perspective-taking and prosocial behavior. *Developmental Psychology*, **1977**, 13, 87-88.

Original Paper

The Relations between Children's Morality and Their Objective Understanding of Conditions in Early Childhood

Hitoshi YOSHIMURA^{1*}

Abstract: The present study examines whether the children's morality affects their objective understanding of conditions in early childhood, and whether the relations are influenced by their sex or grade. The morality with respect to the judgment of right and wrong was classified by the judgment on the basis of a child's intention or results of the damage. In addition, the objective understanding of conditions was constructed by their own false belief, other children's belief, and others' desire. Participants were 77 kindergarteners (44 4-year old and 33 5-year old children). The researches were conducted by methods of interview, and the following significant results were obtained: 4-year old girls, who judged on the basis of the intention, attributed to other children's desire more maliciously than 4-year old girls who judged on the basis of results. On the other hand, 5-year old children's, or 4-year old boys' desire scores were not significantly different according to their morality. Moreover, the false belief and the belief scores were not significantly different according to the morality. Consequently, it seems reasonable to conclude that the development of 4-year old girls' morality has a great influence on their understanding of the other children's desire in early childhood.

Keywords: Morality, Objective understanding of condition, Desire, Early childhood

^{1*} Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp